

ハノイ市との日本語教育分野における交流プログラム 2025(令和7)年度 報告書

福岡県受入プログラム 2025(令和7)年 11月10日～15日

ハノイ市派遣プログラム 2026(令和8)年 3月16日～22日

ハノイ市との日本語教育分野における交流プログラム実行委員会

(福岡県政策企画部国際局国際交流課)

1 事業の趣旨・目的

福岡県とベトナム・ハノイ市は 2008(平成 20)年に友好提携を締結し、様々な分野で交流を深めている。2024 年(令和6)年には、友好提携 15 周年を記念し、新たに教育分野の交流を加えた覚書を締結。これを受けて、日本語教育分野での交流事業を実施することとした。

この事業では、福岡県内の大学で日本語教育について学ぶ学生をハノイ市に派遣し、またハノイ市内の高校で日本語を学ぶ高校生を福岡県に受け入れて相互の交流を行うことで、両地域の将来を担う若者の育成及び友好関係の更なる発展を図る。

2 事業概要

(1)福岡プログラム(受入)

【目 的】福岡県内での日本語学習や企業訪問等を通じ、本県の魅力を伝え、ハノイ市の高校生が将来的な留学や就職先として福岡県を選択する一助となること

【日 程】2025(令和7)年 11 月 10 日(月)～15 日(土)

【参加者】ハノイ市内の高校で日本語を学ぶ高校生 9名

(ヴェット・ドック高校、ハノイ・アムステルダム英才高校)及び各校からの引率教員2名

【内 容】県内大学の視察、日本文化体験

ベトナム人材が活躍する県内企業の視察

県内のご家庭へのホームステイ

表敬訪問(福岡県庁、福岡県議会、在福岡ベトナム総領事館)

(2)ハノイプログラム(派遣)

【目 的】日本語教員養成課程の学生をハノイ市に派遣し、現地の高校での教壇実習や学生交流を行うことで、実践的な指導力を高めるとともに異文化理解を深めること

【日 程】事前研修:2026(令和8)年2月8日(日)、3月3日(火)

ハノイ派遣:2026(令和8)年3月16日(月)～22日(日)

【参加者】福岡県内の大学で日本語教員養成課程を履修する学生 5名

【内 容】(事前研修)現地で行う日本語教壇実習の教案作成、模擬授業

(ハノイ派遣)高校での日本語教壇実習、現地高校生との交流

現地日本語教育機関、在ベトナム日本国大使館訪問

現地進出の県内企業訪問(ハノイ福岡県人会)

市内見学、ベトナム文化体験

表敬訪問(ハノイ市教育訓練局)

3 事業報告

(1)福岡プログラム(受入)

[行程表]

日程	内容
11月10日(月)	早朝 福岡空港着 午前 福岡県庁訪問、オリエンテーション 在福岡ベトナム社会主義共和国総領事館訪問 午後 福岡市内観光
11月11日(火)	午前 県内企業訪問 午後 福岡県議会訪問
11月12日(水)	午前 筑紫女学園大学 (寮見学、キャンパスツアー、茶道体験) 午後 太宰府視察
11月13日(木)	午前 九州産業大学 (キャンパスツアー、日本語ミニ講座、剣道体験) 午後 ホームステイ ※翌日夕方まで
11月14日(金)	午後 送別夕食会
11月15日(土)	午前 福岡空港発

[各日の活動詳細]

11月10日(月)

早朝に入国後、福岡県庁を訪問。対応した生嶋副知事から、これまでの福岡県とハノイ市の交流の実績に触れ、「今回の滞在で福岡県の魅力を大いに感じていただきたい」とあいさつ。

その後、在福岡ベトナム社会主義共和国総領事館を表敬訪問。対応したヴー・チ・マイ総領事から福岡の人や生活環境の良さについて説明。



福岡県庁訪問



在福岡ベトナム総領事館訪問(左列中央:マイ総領事)

11月11日(火)

ベトナム大手 IT 企業 FPT ソフトウェアの日本法人である FPT ジャパンホールディングス(福岡市博多区)を訪問。多くのベトナム人材を雇用しており、会社紹介の後、社員の皆さんが福岡で働くまでの経歴や経験談、日本語の学習歴について説明し、意見交換を実施。

その後、福岡県議会を表敬訪問。対応した中尾 正幸副議長から「皆さんの福岡県での体験が今後の両地域の結びつきをより強める契機となるよう期待します」とあいさつ。



FPT ジャパンホールディングス訪問



福岡県議会表敬訪問(中央:中尾副議長)

11月12日(水)

筑紫女学園大学(福岡県太宰府市)を訪問。

文学部日本語・日本文学科 鷹野教授や同大学の学生の案内により、学生寮、教室、図書館、学生食堂などキャンパスツアーを実施。日本の大学への留学を希望する生徒も多く、興味深く施設の見学をしていた。また、南 博文学長への表敬訪問、全学の学生が一堂に集まる全学礼拝(らいはい)の見学の後、校内の茶室において茶道体験を実施。

訪問の様子は県広報テレビ番組 FBS「優&舞のもっと！知っつく！ふくおか」の取材を受けた。茶道体験の撮影後、キャンパス内に場所を移し、ハノイ市の高校生と筑紫女学園大学の学生に対するインタビューが行われた。

【番組の視聴はこちらから(YouTube)】

<https://www.youtube.com/watch?v=056mL6YENYk&list=PLO5Sz1ojXIIIvip6C5WjCpf9MZjJYzQcI&index=26>



表敬訪問(奥右から2番目:南学長)



教室見学



茶道体験



大宰府天満宮散策

11月13日(木)

九州産業大学(福岡市東区)を訪問。

国際文化学部 酒井教授や同大学の学生の案内により、キャンパスツアーや日本語でのフリートーク、日本語ミニレッスンなどを実施。ハノイ市の高校生に日本語習熟度の差があったが、日本語ネイティブらしい発音に気を付けながら短文を声に出して講師と交互に練習するもので、テンポの良いレッスンであった。

その後、同大学大学院で学ぶベトナム人留学生による自身の日本での経験や暮らしなどをテーマとした講話や、同大学剣道部員の学生を講師とした剣道体験が行われた。動きの型だけではなく、それぞれの所作に込められた礼儀や精神などを丁寧に説明され、真剣に取り組んでいた。

午後からは県内の各ご家庭に2名ずつ訪問し、ホームステイを実施。黒崎ひびしんホール(北九州市八幡西区)にて対面式の後、解散。



集合写真



国際文化学部 酒井教授による日本語ミニレッスン



剣道体験



学生間の交流(昼食)

11月14日(金)

昨日から引き続き、ホームステイでは各ご家庭で日本風の生活を過ごしたほか、ホストファミリーの皆さんの案内により小倉城、いのちのたび博物館など北九州市内を訪問。

夕方にホームステイを終了し、送別夕食会を実施。夕食会ではこれまでの日程でハノイ市の高校生を受け入れてくださった FPT ジャパンホールディングス、筑紫女学園大学、九州産業大学の皆さんを招待し、改めて生徒たちとの交流を深めた。



黒崎駅でホストファミリーとの集合写真

送別夕食会



高校生によるダンスパフォーマンス後



集合写真

11月15日(土)

福岡空港から無事に全員出国、帰国の途へついた。

[総評]

受入プログラムでは、大学訪問やホームステイをはじめとする様々な体験を通じて、ハノイの高校生に本県の魅力を多角的に体験してもらい、将来の留学・就職選択において福岡県を強く意識してもらうという目的を概ね達成できた。参加生徒からは「プログラムに参加できてよかった」「また福岡に来たい」といった肯定的な感想が多く聞かれた。さらに、参加生徒が帰国後に周囲に福岡の経験を伝えているとの報告もあり、波及的な効果も期待される。

(2)ハノイプログラム(派遣)

- [参加者]筑紫女学園大学 4年 小倉 明華音
 福岡女学院大学 4年 中垣 二子
 筑紫女学院大学 3年 石橋 もも
 西南学院大学 1年 宮本 さら
 西南女学院大学 3年 大西 桜妃 ※応募順

[行程表]

【事前研修】

日程	内容
2月8日(日)	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・福岡県・ハノイ市の紹介(講師:福岡県国際交流課 福重事務主査) ・ベトナムの教育事情について ※オンラインにて実施 (講師:国際交流基金ベトナム日本文化交流センター 藤長 日本語上級専門家) ・日本語授業 教案作成指導 (講師:(一財)日本国際協力センター 叶 日本語教育専門職員)
3月3日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・参加学生による模擬授業、教案ブラッシュアップ指導 ・ベトナム語ミニ講座 ・プログラム詳細、渡航に係る注意事項の説明

【ハノイ派遣】

3月16日(月)	午前 福岡空港発 午後 ノイバイ空港着
3月17日(火)	午前 国際交流基金 ベトナム日本文化交流センター訪問 午後 ハノイ市表敬訪問 在ベトナム日本国大使館広報文化センター
3月18日(水)	午前 受入式(対応:ヴェット・ドック高校 クイン校長) 教室内視察、授業準備 午後 文化体験(バッチャン村 陶芸教室)
3月19日(木)	午前 日本語教壇実習 ※2組に分かれ、ヴェット・ドック高校とハノイ・アムステルダム英才高校の2校で授業を実施 午後 ハノイ市内視察(ハノイ高校生の案内による文廟及びタンロン遺跡訪問)
3月20日(金)	午前 日本語教壇実習 ※2組に分かれ、ヴェット・ドック高校とハノイ・アムステルダム英才高校の2校で授業を実施 午後 ハノイ福岡県人会との交流 ・日越大学の大学生との交流 ・県内からハノイ市へ進出した企業への訪問 ・ハノイ福岡県人会会員(企業駐在員等)との懇親会
3月21日(土)	終日 市内観光、自由時間
3月22日(日)	深夜 ノイバイ空港発 早朝 帰国

[各日の活動詳細]

① 事前研修 2月8日(日)、3月3日(火) ※2回実施 (1回目)

オリエンテーションの後、福岡県国際交流課から福岡県とハノイ市の紹介、またオンラインで国際交流基金ベトナム日本文化交流センターからベトナムの教育事情について説明。

その後、実際にハノイ市の高校で参加者が行う日本語授業の教案作成について(一財)日本国際協力センター九州支所の日本語教育専門家から指導を行い、それぞれが日本の文化について紹介するという観点での特別授業の教案テーマを考案。次回研修までの間、随時専門家へ助言を求めながら教案を作成。

(2回目)

それぞれが作成した教案に沿って模擬授業を実施。

受入先高校の条件により45分授業を同一クラスで2コマ続けて90分授業とする者、45分授業を異なる2つのクラスで授業をする者がいたが、それぞれペース配分などに気を配りながら25分程度に短縮した模擬授業を行い、専門家からのフィードバックを受けた。

模擬授業後は、ベトナム語通訳による簡単なベトナム語講座、渡航時の留意事項に関する諸注意を行って、事前研修を修了。



ベトナムの教育事情の講義(講師:藤長氏)



ベトナム語ミニ講座の資料

② ハノイ派遣 3月16日(月)

福岡空港から定刻どおりに出発し、午後ハノイ・ノイバイ空港へ到着。受入先高校の教員らの出迎えを受けて、宿泊先へ移動。この日はチェックイン後、高校教員の案内により、市内を散策。

3月17日(火)

独立行政法人国際交流基金ベトナム日本文化交流センターを訪問し、当地での日本語教育に関する各種事業の紹介を受けた後、座談会形式でベトナムの日本語教育の現場の様子や、参加学生が教案を作成して実施しようとする授業の進め方についての意見交換を行った。

その際、訪問先の一つであるヴェット・ドック高校の日本語教員が1名同行し、座談会に参加。



座談会の様子 右手前が事前研修でも講義を行った藤長日本語上級専門家



国際交流基金 ベトナム日本文化交流センターにて

午後から、本事業のハノイ市側主催者であるハノイ市教育訓練局を訪問し、グエン・ヴァン・ヒエン局長への表敬を実施。参加者代表あいさつとして筑紫女学園大学 小倉さんからハノイ市の歓迎への感謝と高校での交流への意気込みを伝え、その様子は地元紙(Hà Nội mới)とオンラインニュース(Hanoi online)で取り上げられた。



表敬の様子 右奥で立って挨拶しているのが小倉さん



集合写真

ハノイ市を表敬訪問した後、在ベトナム日本国大使館広報文化センターを訪問。

施設内は日本文化を紹介するための書籍(漫画から、雑誌、古典文学まで)、着物、日本人形などが展示されており、ベトナム人入館者が図書館のように利用していた。

大使館からは、広報文化センターにおける日本文化を広めるための取組紹介や、ベトナムにおける教育事情について講義を受けた。



センター内の漫画コーナー



集合写真(左端:日本国大使館 廣松氏)

3月18日(水)

受入先高校の一つであるヴェット・ドック高校にて受入式を行い、同行のクイン校長らが出迎え、歓迎のあいさつを頂いた。

その後は翌日以降授業を行う教室に入り、機材のチェック、授業用スライドの確認などを行った。

その際、同行の日本語教員であるガー先生、日本語パートナーズとして同校に勤務する神田先生へ授業の進め方の助言を得ながら、最終調整を行った。

午後からはもう一つの受入先高校であるハノイ・アムステルダム英才高校を訪問。前年11月にハノイ市から福岡県を訪問した高校生を中心に、一緒に文化体験(ハノイ市郊外・バッチャン村での陶芸・絵付け体験)を行った。



ヴェット・ドック高校での受入式



授業準備の様子 学生同士で授業の進行を確認



バッチャン村での絵付け体験
(右は福岡県受入プログラム参加の高校生)

3月19日(木)

午前は2組に分かれて各高校を訪問し、日本語授業を実施

【ハノイ・アムステルダム英才高校】

授業担当:筑紫女学園大学 4年 小倉 明華音 対象学年:高校1年生 ※45分×2コマの90分授業

授業テーマ「春を感じる切り紙を作ろう」

日本の桜を題材に、日本人が桜に対して持つ「出会い」「門出」「合格」「はかなさ」など特別なイメージ、情緒、考え方について説明。

その後、5~6名のグループに分かれ、桜をモチーフにした切り絵に日本語で作文した願い事を書き、模造紙に貼り付けて発表するというグループワークを行った。

(授業の様子)



桜の切り絵の作り方を説明



出来上がった桜の切り紙を元に、願い事の発表

【ヴェット・ドック高校】

授業担当:西南学院大学1年 宮本 さら 対象学年:高校1年生 2クラス ※各クラス45分授業

授業テーマ「日本の文化」(福岡について、食文化、高校生の恋愛)

45分の授業の中で、「教科書の授業では出てこない日本語、日本のこと」をテーマに、福岡の魅力や食文化(食べる前後の挨拶、麺をすすって食べる習慣)を紹介。また、恋愛についての説明の際には、生徒同士で日本語を使った模擬告白を体験した。

(授業の様子)



日本のアニメを例にとった恋愛の説明



ベトナムには麺をすすって食べる文化がないことを踏まえての食文化紹介

授業担当:西南女学院大学3年 大西 桜妃 対象学年:高校3年生 ※45分×2コマの90分授業

授業テーマ「かるた遊び」

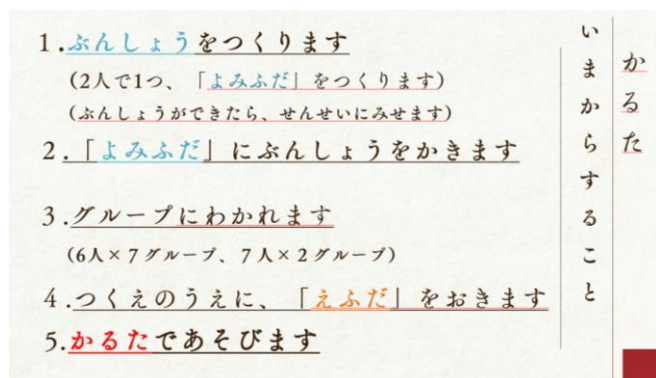
日本の伝統的な遊びであるかるたについて説明。その後、グループに分かれ、6~7名の各グループにあらかじめ準備した絵札(日本(福岡)文化、ベトナム文化を示す写真や絵)を配り、その絵札を元に各グループ3~4枚ずつの読み札を日本語で作文。

その後、出来上がった読み札でかるた遊びを実施。各グループで予選を行い、勝ち抜いた生徒で決勝戦を行った。

(授業の様子)



絵札からの情報の読み取り方、読み札の書き方を説明



授業の進行を生徒に説明したスライド

午後からは、両高校の生徒の課外交流プログラムとして、ハノイ市内の史跡(文廟、タンロン遺跡)を見学。ハノイ市の高校生が日本語で案内し、それに対して福岡県の参加者が質問するなど、日本語をベースとした交流を実施した。



生徒たちのガイドの様子



集合写真(文廟)

3月20日(金)

前日に引き続き、午前は2組に分かれて各高校を訪問し、日本語授業を実施

【ハノイ・アムステルダム英才高校】

授業担当:福岡女学院大学3年 中垣 二子 対象学年:高校1年生 ※45分×2コマの90分授業

授業テーマ「よさこい」

日本(高知県)発祥のよさこいの由来や歴史、踊りの所作や道具などの意味を説明した後、校内のホールに移動して全員でよさこいを体験した。

また、授業前にはハノイの生徒たちが、ベトナム各地の魅力についてグループで作成したスライドによってプレゼンテーションを行ったほか、授業後には生徒による歓迎パフォーマンス(歌、演劇)が披露された。

(授業の様子)



よさこいについての説明



よさこいの踊りの実演(中央手前が中垣さん)



ハノイ市の生徒によるベトナム各地の紹介



歓迎パフォーマンス(ベトナム故事の演劇)

【ヴェット・ドック高校】

授業担当:筑紫女学園大学3年 石橋 もも 対象学年:高校2年生 ※45分×2コマの90分授業

授業テーマ「日本のお守り」

日本のお守りについて、どのような場所で手に入るか、どのような願いを込めたものがあるのかを説明し、グループに分かれて各自がお守りに込めたい願いについて相談しながら考えた。

その後、願い事を日本語で作文し、折り紙を使って願いを込めたお守りを作成。最後に各生徒がどのような願いを込めたのかを発表した。

(授業の様子)



お守りづくりの作業指導

授業に使用したワークシート

午後からは、福岡県にゆかりのあるハanoi市在住者で構成されるハanoi福岡県人会「ばってん会」のご協力のもと、現地大学や企業の訪問、懇親会を実施。

① 日越大学

同大学に勤務するハanoi福岡県人会会員の紹介により、日本語を学習するベトナム人大学生の卒業論文の概要についてプレゼンテーションを受け、意見交換を実施。

② City Ascom Vietnam

同社において副社長を務めるハanoi福岡県人会会長の中村氏の紹介により企業訪問を実施。会社概要及びベトナム人社員の日本語教育支援について説明を受け、日本語レベル N2 以上の社員4名と意見交換を実施し、日本語学習方法や勤務時の日本人社員とのコミュニケーションについて意見交換を行った。

③ ハanoi福岡県人会会員との懇親会

様々な企業のベトナム法人に駐在しているハanoi福岡県人会の皆さんと懇親会を行い、これまでのキャリア形成過程やベトナムでの働き方、暮らし方についてお話を頂きながら夕食をとった。



日越大学学生の発表の様子



シティアスコム訪問

3月21日(土)

この日、昼の間は自由行動として各自市内を散策したり、お土産を買ったりするなどして過ごした。

夕食の場では、ヴェット・ドック高校の日本語教員であるガー先生、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターの藤長先生を交えて今回の授業のフィードバックや課外交流の振り返りなどをしながら懇談の場を設けた。

その後、ノイバイ空港から定刻どおりに出発し、翌朝福岡空港へ到着、その場で解散。

[総 評]

派遣事業では、福岡の参加学生全員が体調を崩すことなく、各自が目指していた授業を実施することができた。授業以外の時間も、ベトナム人の日本語の先生をはじめ、ハノイの高校生やベトナムの方々と交流する機会が多く、異文化への理解を一層深めることができた。

参加学生からは、「授業実践を通じて多くの学びを得られた」「ベトナムの文化や人々に魅力を感じた」といった肯定的な感想が多く聞かれた(事業参加報告書は次ページ以降)。

また、ハノイの日本語の先生方からは、「生徒たちが意欲的に授業を受けていて、教科書だけでは得られない日本文化を学ぶことができ良かった」との評価をいただき、双方に実り多い交流となった。

総じて、派遣事業の目的としていた「実践的な指導力の向上」と「異文化理解の促進」は、高い水準で達成できた。

ハノイ派遣プログラム参加者による報告書

1. 小倉 明華音（筑紫女学園大学）授業テーマ「春を感じる切り紙を作ろう」

○プログラムへの応募理由

本プログラムに応募した理由は、昨年インドネシアの高校で日本語教育支援に携わった経験から、東南アジアの中等教育段階における日本語教育と自治体による国際交流の在り方に関心を持ったためである。現地では、日本語学習が生徒の興味や将来の選択肢を広げる様子を実感し、教育と交流が人と地域をつなぐ役割を果たしていると感じた。本プログラムでは、言語指導にとどまらず、学習者の主体性を引き出す授業づくりや、継続的な関心につなげる工夫について学ぶことを目標としていた。

○特に印象に残った経験

特に印象的な活動は、課外活動としてハノイの観光地を訪れ、高校生たちがガイドをしてくれる観光地案内の活動である。生徒たちはクラス全体で協力し、限られた語彙や表現の中でも日本語で伝えようと積極的に工夫しながら案内を行っていた。その姿から、日本語の正確さだけでなく、「伝えたい」という意欲そのものが学習そのものを支えていることを実感した。学生たちの説明を通してハノイの文化や歴史についての理解を深めることができた点も印象的である。個人の能力だけでなくクラスの団結力によって活動が成り立っていたことも強く感じた。

教壇実習では、「春を感じる切り絵づくり」をテーマに桜と切り紙の文化紹介を行った。想定外のトラブルや時間配分の難しさに直面しながらも、授業中は生徒の反応に応じてクイズや板書を工夫することで理解を促す重要性を実感した。

また、本プログラムでは叶先生による事前研修での教案指導や国際交流基金の専門家の先生方からのアドバイスをいただいたことで、計画的に授業準備を進めるだけでなく、自身の授業を客観的に見直す機会となり、大きな学びと刺激を得ることができた。さらに、高校や大学、日系企業など多様な場における日本語教育に触れ、特に日系企業で働く学習者との交流を通して、学習目的やキャリア観の多様性について理解を深めることができた。

○プログラムを通して学んだことと今後の展望

本プログラムを通して、授業は計画段階から柔軟性を持って設計する必要があること、そして学習者の背景や目的に応じた関わり方が重要であることを学んだ。また、他大学の学生との交流から多様な教育観に触れ、自身の考えを見直す機会にもなった。

今後は、働く人のための日本語教育にも関心を広げ、社会人としての経験を積みながら、学習者に寄り添った教育を実践できる日本語教師を目指したい。そして、日本語教育と国際交流の両面から、日本人と外国人が安心して共に暮らせる社会の実現に貢献していきたい。

2. 中垣 二子（福岡女学院大学）授業テーマ「よさこい」

○プログラムへの応募理由

本プログラムに応募した理由は、将来日本語教師として働くにあたり、国際交流の現場で得られる実践的な学びを教育に活かしたいと考えたためである。

大学では日本語教育の演習や指導法を学んできたが、学習者の母語や文化的背景、学習目的によって学び方や課題が大きく異なることを、これまでの大学生活 4 年間の経験を通して実感してきた。そのため、実際に海外の教育現場を経験し、学習者の実情を直接理解したいと考えた。

また、ベトナム・ハノイは日本語学習者が多く、日本への留学や就労を目指す人も増えている地域であることから、現地での交流を通して学習動機や困難点を知りたいという目標を持って参加した。

また、自身がこれまで学んできたよさこいなどの日本文化を授業に取り入れ、言語だけでなく文化の側面からも伝えられる力を伸ばしたいと考えていた。

○特に印象に残った経験

特に印象に残ったのは、教壇実習において実際に授業を行った経験である。アムステルダム英才高校の日本語科の 1 年生クラスを担当し、座学ではよさこいの歴史や音楽衣装の特徴を説明しグループワークではよさこいとベトナムの踊りを比較し発表してもらった。

その後、動きや音楽を取り入れながら実際によさこいを体験してもらう活動を行ったが、言葉だけでは十分に伝わらない場面があった。そのため、やさしい日本語やジェスチャーを用いて説明を工夫したところ、学生の理解が深まり、積極的に参加する様子が見られた。

また、学生同士で意見を共有する場面では、互いに助け合いながら理解を深めていく姿が印象的であった。この経験から、相手の立場に立ち、伝え方を柔軟に変えることの重要性を実感することができた。

○プログラムを通して学んだことと今後の展望

本プログラムを通して、言語教育においては文化や体験を取り入れることが学習者にとっての学習意欲の向上につながると学んだ。

また、学習者の反応を見ながら授業を調整する柔軟性も重要であると感じ自分自身も楽しく授業をすることで互いに良い授業になると考える。今後は、実際に日本語学校で働き様々な文化背景を持つ学生と関わっていく。

そのためこの経験を活かし、学習者一人一人の背景や目的に寄り添った授業を実践していきたい。また、得られた学びを周囲と共有し、日本語教育と国際交流の意義を発信できる日本語教師を目指したい。

3. 石橋 もも（筑紫女学園大学）授業テーマ「日本のお守り」

○プログラムへの応募理由

本プログラムに応募した理由は、将来教員として求められる実践的な指導力を身につけるとともに、海外の教育現場で実際に授業を行う経験を通して、自分の指導がどの程度通用するのかを確かめたいと考えたからだ。

また、日本とは異なる文化や学習環境の中で生徒と関わることで、自身の視野を広げ、教師としての在り方を見つめ直したいという思いもあった。

加えて、大学で学んできた理論を実際の教育現場でどのように活かすことができるのかを検証したいという意図もあった。参加前は、言語や文化の違いがある中でも、生徒に分かりやすく簡潔に指示を出し、授業を成立させることを目標としていた。

さらに、生徒の反応を踏まえて柔軟に授業を展開する力を身につけるとともに、日本語学習に対する意欲や姿勢を直接感じることで、自らの授業観を深めたいと考えていた。

○特に印象に残った経験

プログラムの中で特に印象に残ったのは、教壇実習におけるお守り作りの授業である。授業では、私が説明を行う前から、生徒たちが主体的に折り紙でお守りを作り始めていたことが強く印象に残っている。

現地には折り紙クラブがあると聞き、日本文化に対する関心の高さに加え、生徒の主体的に学ぼうとする姿勢を実感した。

この経験を通して、生徒の実態や既存の知識を踏まえた授業設計の重要性について改めて認識することができた。また、生徒の反応を的確に捉える観察力の必要性についても強く感じた。

○プログラムを通して学んだことと今後の展望

今回の経験を通して、生徒の主体性を引き出すことの重要性や、授業は教師と生徒の相互作用によって成立し、深まっていくものであるという理解が深まった。

また、異なる文化や背景を持つ生徒と関わる中で、自身の固定観念に気づき、柔軟に物事を捉える姿勢が養われたと感じている。

今後はこの経験を活かし、生徒一人ひとりの実態を的確に把握したうえで、主体的な学びを促す授業づくりを実践していきたい。

さらに、今回得た国際的な視点を大切に、多様な価値観を尊重しながら指導できる教員を目指していきたい。

4. 宮本 さら（西南学院大学）授業テーマ「日本の文化」(福岡について、食文化、高校生の恋愛)

○プログラムへの応募理由

私が本プログラムに応募した理由は、小学生の頃から漠然と抱いていた「日本の文化を海外に伝える人になりたい」という思いを、実際の経験として具体化してみたいと考えたためである。

応募要項の中に、日本文化を紹介する授業を行うという内容を見たとき、これまで想像の中にあっただ自分の目標を現実の行動に移す機会になるのではないかと感じた。

また、自分の伝え方によって現地の高校生がどのような反応を示すのか確かめたいという思いもあった。一方で、私は昨年まで高校生として授業を受ける側にいたばかりであり、教える立場に立てるのかという強い不安もあった。

今回の参加メンバーの多くは教壇経験のある先輩であり、大学一年生は私一人だったため、45分という授業時間の中で何を伝えるべきか悩み続けた。テーマは渡航の2日前までに5回以上変更した。迷いの連続ではあったが、それは「何を伝えれば現地の高校生の興味につながるのか」を考え続けた結果でもあった。最終的にスライドや教案を何度も作り直しながら自分が理想とする授業に少しでも近づけるよう準備を重ねた。

○特に印象に残った経験

授業内容を考える過程では、日本文化をどのように伝えるべきかについても試行錯誤した。当初は「おもてなし」をテーマにする予定であったが、自分の知識だけでは表面的な説明になってしまうと感じた。

そこで、福岡県内の観光地である太宰府や柳川を実際に訪れ、旅館の方や店舗の方々に話を伺いながら接客の工夫を観察するなど、自分なりに調査を行った。

しかし、その経験を通して気づいたのは、「おもてなし」は日本だけの特別な文化ではなく、私が初めてハノイを訪れた際にも感じた、ベトナムの人々の温かさにも通じるものであるということであった。

この気づきから、日本文化を一方向的に説明するのではなく、現地の高校生が興味を持ちやすいテーマを通して日本への関心を高める授業にしようと考えようになった。

その結果、授業では福岡の紹介、日本の食文化、そして日本の高校生の恋愛文化など、身近で親しみやすい話題を中心に構成した。アニメの画像やクイズを取り入れながら、生徒が日本語で発言する機会を多く作ることを意識した。実際の教壇実習では、クラスごとに雰囲気が大きく異なることを実感した。

一つ目のクラスでは想定よりも早く説明が終わってしまい、予定していたスライドが残っているにもかかわらず20分近く時間が余ってしまった。授業中は大きな不安を感じたが、生徒の反応を見ながら活動の時間を増やすなど柔軟に内容を調整することにした。その結果、「告白」をテーマにした場面では教室全体が大いに盛り上がり、生徒同士が日本語を使いながら楽しそうに会話する姿を見ることができた。二つ目のクラスではその反省を活かし、生徒が考え発言する時間を意識的に増やして授業を進めた。

授業後には「楽しかった」と声をかけてくれる生徒も多く、教師と生徒と一緒に授業を作り上げていく感覚を強く実感することができた。

○プログラムを通して学んだことと今後の展望

今回の研修を通して、授業とは準備した内容を一方的に伝えるものではなく、生徒の反応や教室の雰囲気に応じて柔軟に変化させながら作り上げていくものであると学んだ。

また、日本文化を海外に発言するためには、自国の文化だけでなく相手の文化や背景を理解し、互いの違いを尊重しながら対話する姿勢が重要であることを実感した。

今回の経験は、私にとって「日本文化を伝える」という目標を改めて見つめ直すきっかけとなった。同時に、自分にはまだ知識や経験が不足していることも強く感じている。

今後は、日本文化について体系的に学ぶとともに、海外の人々と関わる機会に積極的に参加し、実践的な経験を重ねていきたい。

ハノイでの 45 分の授業は、私にとって小さな一歩にすぎない。しかしこの経験を出発点として、これからも多くの人や文化に触れながら学びと挑戦を重ね、日本と世界をつなぐ存在になれるよう成長していきたい。

5. 大西 桜妃（西南女学院大学）授業テーマ「かるた遊び」

○プログラムへの応募理由

私は将来、日本国内で日本語を教えることを想定しているが、その際に外国人生徒がどのような学習環境で育ってきたのかを理解しておく必要があると感じ、本プログラムに応募した。生徒が授業中に楽しそうでなかったり、不満を抱えたりしているように見えた時、その背景や理由が分からなければ適切な対応ができないのではないかという不安があったためである。

そこで、実際にベトナムの教育現場に触れ、彼らがどのような授業を「普通」や「心地よい」と感じているのかを知っておきたいと考えた。また、将来教壇に立つ際に、外国人生徒がどのような話題に興味を持ち、どのような活動に積極的に参加するのかを把握しておくことは、授業づくりにおいて大きな助けになると考えていた。

○特に印象に残った経験

特に印象に残った経験は、授業の最初の活動で、私の説明の順番が教案と異なってしまい、生徒を混乱させてしまったことである。伝わりにくい授業構成になってしまい、外国語で学ぶ生徒にとって負担をかけてしまったと反省した。

しかし、その後に行った「かるた遊び」では、生徒たちは驚くほど一生懸命に取り組み、どのチームでも良い試合が行われていた。特に決勝戦では、読札の最初の一文字が聞こえた瞬間に札を取る生徒が現れ、本物の競技かるたのような緊張感があった。この集中力とエネルギーは、私に強い印象を残した。

○プログラムを通して学んだことと今後の展望

この経験を通して、生徒に授業を楽しんでもらうには、説明の順番を丁寧に考え、伝わりやすい流れで示すことの重要性を改めて実感した。

具体例やお手本を示すといった基本的な工夫は、対象が誰であっても重要なポイントであるが、相手が外国人生徒である場合には特に欠かせないことを学んだ。

今後は、非母語で授業を受ける生徒への配慮を忘れず、「なぜこの順番なのか」「なぜこのタイミングなのか」という授業の構成一つ一つに理由を裏付けし、言語面ではもちろん、授業構成の面でも、生徒の負担が少ない授業を行っていきたい。